

---

# 異常な私は俺で僕で転生だから

シオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異常な私は俺で僕で転生だから

### 【Nコード】

N7160V

### 【作者名】

シオン

### 【あらすじ】

めだかボックスの世界へ、厳密に言えばその平行世界へ。  
生まれる世界を間違えたという理由で、雪島月夜が転生した！  
まあ、つまるところ、異常な私は過負荷な俺で悪平等な僕なのさ。

## プロローグ

目が覚めたら真っ暗だった。

なーんて、事があるわけ・・・現実を見ます。

自分の体ははつきり見えているのに周りは全部黒。

あ、自己紹介遅れました。

私の名前は雪島ゆきしまつぎよ月夜です。

一応、女ですがよく男と間違われます。

しかも、よく告白されたり・・・。ショートカットだからですかね。

それは置いときまして、私はなんでここに居るんでしょうかねえ。

「やあ、聞こえる？」

どなたでしょうか。周りにはどなたもいらっしやいませんが。

「あ、待ってて今そっち行くから」

はあ、そうですか。

そのまま待っているると目の前に何とというか、白い人がいました。

はい、白い人です。それ以外の何ものでもありません。

「白い人って！光設定間違えてたかな・・・。」

そういうと、白い人はだんだん人っぽくなっていきました。

て、あれ？

「さつきから、私声に出してました？」

「いや、出してなかったよ」

「顔に出してました？」

「いや、だって僕。天使だもん」

だもんで。

あー、というかこれはあれですか。  
間違っつて殺しちゃった、てへっ！  
っつてやつですか。

「うんうん、そうそう」

「マジですか……。」

あーあ、まだやりたいことあつたのになあ。  
ルンフ〇クとか4でるらしいし。  
……どうでもいいことか。

「いやー、ね？君の場合はさ、  
生まれてくる世界間違えちゃったんだよ。」

「……は？」

「君はほんとは『めだかボックス』の世界に生まれるはずだったんだ。  
だ。」

知ってる？」

な、なんですと？私はほんとはあの先生に作られるはずだったのか  
！？

というか、アンケート入れてます。

めっちゃ好きです。はい。

「だけど、まあ、事情は割愛して。  
君、スキル持ってたでしょ？」

「ああ、あれですか」

あれって、アブノーマル マイナス 異常とか過負荷だったのか。  
どつりで、押さえるまで大変だったわけだ。

「で、私はこのあとどうなるのですか？」

「ん？ 『めだかボックス』の世界に飛ぶよ？」

「いやいや、今さら絡めないでしょう」

「はっはー、大丈夫君の行く世界はコピーだから。  
僕が頑張って作ったんだ。君もがんばれよ」

私のために世界が作られました。  
どっだけスケールの大きい話なんだか。

「あなたは何でもできるのですか？」

「何でもはできないよ。できることだけ」

・・・ツッコミマセンヨ？

「ではでは、君のスキルを思い存分使いたまえ！  
行く時間は中学生から！」

「え、なんでそんな中途半端な・・・」

意識が途切れました。

## プロローグ（後書き）

因みに、主人公の髪形は黒髪にアホ毛をつけた感じですが、詳しいプロフィールは次回で。

## プロフィール(前書き)

これからのネタばれになりますので飛ばしてOKです。



## プロフィール

ゆきしまつきや  
雪島月夜

転生前は中学二年生

性別は女

身長は165センチ

容姿はかなりかっこいい、かわいいじゃなくてかっこいい

敬語はただの癖

アブノーマル エキストラ  
異常は『風景』キレると『暗殺者』となる。

エキストラ  
『風景』は誰にも気にとめられなくなるスキル  
ミスターアンソウン  
『知られざる英雄』とは違い認識はされている。

ので、あまりに目立つ行動をしてしまうと解けてしまう。  
ダイクプレイヤー  
『暗殺者』はさらに身体能力上昇等の特典が付きます。

けどキャラが壊れる。

このときの一人称は私。

マイナス  
過負荷は『孤独』

こちらからは干渉できるが相手からはできなくなるスキル  
つまり相手をぼっこぼっこにできます。

このときの一人称は俺。私るときとは違う人格です

ノットイコール  
僕は悪平等だけど  
スキルなし。

一人称変換は人格以外にも  
アホ毛が変化します。  
私はくるんとしてて  
俺はぴんとしてて  
僕は二本に増えます。

こんな感じですよ。

> i 3 7 7 3 2 — 4 7 2 9 <

描いちゃいました(笑)  
色なしです、手抜きですみません……。  
因みに、右の人は俺です。旗が変でし……。

## プロフィール（後書き）

こんな感じで行きたいと思います。  
最後に月夜は私の時だけ眼鏡をかけています。

**挿絵集！（前書き）**

とりあえず、全部に注意！！

## 挿絵集！

パソコンを使えない状況でカツとして描きました。  
オール下書き、原作キャラ！？、等々……。  
苦手な人はバツク！！しかも、うる覚え書きという！！  
いいですか？いいですね？では……

俺のとき。

> i38290 — 4729 <

不知火ちゃん確保のとき

> i38293 — 4729 <

小話目のとき

> i38300 — 4729 <

いたいたいのとき

> i38295 — 4729 <

財部ちゃんのとき

> i38296 — 4729 <

財部ちゃんのとき2

> i38297 — 4729 <

カオスのとき

> i38298 — 4729 <

おいしいパフエの作り方のとき（本編外）

> i 3 8 2 9 9 — 4 7 2 9 <

と、いうわけでしたー！ー！！

ここまで見てくださった方、ありがとうございます。

というわけで（どういうわけだ）

これからもどんどん追加していきたいと思います。

リクエストもおk。ただし、シオンの力量に限る。

とりあえず全部鉛筆です。色をつけたくてもつけられません。

・・・頑張ります。

## 一話目！

目が覚めたら動けませんでした。

いやいや、えー？

なんか全身に激痛が走っているんですが！？

まさか叩き落としましたか……。

周りは部屋、ですね。普通の家っぽいですが。

床に寝ているところから、道行く人が助けしてくれたわけではなさそうですね。

つまり、ここがこれからの私の住む家ですか。

はあ、とりあえずあの子を呼びますか。

「おーい、俺、出てきてー」

意識が深くに沈んで行きました。

たどりついたのはふわふわしている真っ白な空間。

私は心の部屋と読んでいます。

ここには私以外に二人います。

すなわち俺と僕です。マインスフットイコール

「さっきの見てたよね？じゃ、俺頑張つて！」

「丸投げかよ！ちつ、ふざけた天使だぜ。

じゃ、行ってくる」

ふわふわ、俺もなかなか丸くなりましたな。

以前は即効で暴れていましたし。

僕の方は……。

「ねえねえ！ここって本当の安心院さんに会えるんだよね！  
やったー！！」

「相変わらずの僕ですね」

この子、前の世界から僕は悪平等ほくなんだよ！  
って、言っていましたからね。ただの中二病かと思っていましたが。  
さてさて、俺の方は何していますかね。

・・・俺サイド・・・

はあー、何もかもめんどくせえ。さっさとやって私と変わるか。  
スキルを発動してっと。はい、終了。

あ、なんのスキルかって？

そりゃ、過負荷マイナスのスキルだよ。

他は私に聞いてくれよ。あいつが一番俺を知っている。  
さてと変わって、寝よ。

・・・私サイド・・・

おお！体が動きます！！

ここで私による俺のための僕コーナーです！

俺のスキルは『孤独オンリー』

あらゆるものから干渉されないようにできるのだ！

今回は痛みという干渉から避けたのだ！

・・・うん。さすがにテンションあげすぎましたか。

と、物色物色。あ、メモ発見。

「やあ、スキルは使えたかい？ちょっとやりすぎたかもね。

君がこれから行く学校は箱舟学園だ。地図とかその他もろもろは



裏に書いておいたからみておいてね。  
高校までの生活費は振り込んでおいたから、  
その後はなんとかがんばってね。  
あ、その家は好きに使っていいから。

天使より」

何でしょう？なぜかものすごくイライラします。  
裏には入学式は明日とあります。  
制服もタンスに入っています。やることなしです。  
通帳を見ますと・・・無駄遣いはできませんね。  
明日、誰か登場人物に会えるといいなあ。

一話目！（前書き）

なぜかキャラが全然出てきません・・・。

## 二話目！

入学式です！

終わりました！

・・・ほんとに何もなかったんですよ。

よくあるような感じで長い校長先生のお話到校歌斉唱。

校歌を覚える気はさらさらありません。きりつ。

さてさて、クラスは一組ですか。近いことはいいことです。

着きました、ガラガラ。

そこに誰ひとり立っていませんでした。

あ、皆着席していたという意味ではありません。

言い換えるならば、

そこには全員這いつくばっていました。

文字どおり、床にべったりと。

「これは・・・」

「『ねえ、君、僕も教室に入りたいんだ。

のいて』」

「あ、すみません。どうぞ」

「『・・・ふーん。そうなんだ』」

あれれ、よくみたら球磨川さんでした。

そうなんだってどうなんですかね。

というか

「入らないんですか？」

「『君はこれを見てどう思うんだい？』」

「これですか？なんとも思いませんが。」

「あ、座るところがないのは困りますね」

「『こいつは驚いた。このクラスに僕のほかにこれほどの  
過負荷、いや異常アブノーマルがいるなんてね。  
名前を聞いてもいいかい？』」

「雪島月夜ですよ。あと、買いかぶりすぎです」

「『僕は球磨川禊だよ。買っても、かぶってもいないから  
安心してよ、ね！』」

瞬間。無数の螺子が飛んできました。  
ほんとこの人は頭の螺子が飛んできますね。  
全く。

「俺が出なきゃ、死ぬとこだったろ。」

「球磨川くんよお！！」

「『！！』」

ネジハオレニカンシヨウデキナイ  
全ての螺子は俺をすり抜けていく。

「っは、こうしてみると一応急所は外してんだな」

「『君は誰だい？雪島さんかな？』」

「ええ、そうです。それにしても俺はいきなり出てこないでください。」

キレちゃうところでした。

改めて、球磨川君。

私が「俺が」僕が「雪島月夜です。」

仲良くしてくださいね」

「・・・僕が球磨川君だ。仲良くしてね」

「おや、括弧つけないのですか？」

「『いや？何となく、さ』」

そういつて、球磨川君は教室に入って行きました。  
そして一言。

「『これ、僕がやったって言ったらどう思う？』」

それは私にとっては愚かすぎる愚問でした。

「何も思いません」

そう、人にとって一番いい関係は  
無関係。

何も知らず、何も思わない。  
理想的でしょう？

とりあえず、黒神めだかとはそうなりたいですね。

二話目！（後書き）

次回は球磨川君目線で行きたいと思います。

## 二話目！裏？（前書き）

球磨川さんのキャラが崩壊しました。球磨川さんのキャラが崩壊しました。

大事なことなので、二回言いました。ほんとに崩壊しました。

## 二話目！裏？

さてさて、僕の名前は球磨川禊だよ。

今日も誰を不幸にしようか頑張ってる考えています！

そんな僕も明日からは中学生。

どんなことをしようかな？

友達できるといいなあ、なんちゃって。

とりあえず、クラスメイトの心は折っておこうと。

授業中は静かにしなきゃいけないもんね。

だから、

僕は悪くない。

とか言ってる。

ああ、楽しみだなあ。

そして、入学式当日！

まじめに並んでいたら僕の過負荷気持ち悪さにやられて

周りの人はみんな保健室に行っちゃった。

まったく、ひどいよね。

この恨みは道行く人に晴らすとしようかな。

でも、知らない人は怖いからやっぱりこの学校の人にしよう。

教室に着いたし、クラスメイトでいいや。

ねえ、その君立ってたら邪魔だよ？

「『のいて』」



もう、心が折れちゃったか。

僕のスキルを使うまでもないね。

ま、『ブックメーカー却本作り』はそこまで便利じゃないし、スキルなんか添え物みたいなものだろう？

ま、それはともかくとして。

僕は教壇に歩いて行き、一言。

「『僕と友達になつてよ』」

あらら、誰もかれも這いつくばっちゃって。

さすがの僕も少しへこむなあ。

あ、そういえば僕の周りで心が折れなかったのがいたな。名前は知らないけど、黒髪のかわいいのとかっこいいの。どちらもプラスそうだから、友達にはなれないかな。でもちよつと、遊びに行こう。

・・・数分後・・・

まさかの会えないとはね。

かわいいほうには会えたけど、

あの子は安心院なじみだつて言つてたよ。

気まぐれで何もしなかつたけど、

次の子は螺子でも投げつけようかな？

おや、教室の前に人がいるぞ。

もう、遅刻じゃないか。駄目だぞ！

なーんて、ね。

あれ？黒髪のかっこいいのじゃないか。

さて、これについてどう思っているのかな？

・・・え？

何も思つてない？

何も感じていない？

その眼には何も映っていない？

ねえ、僕を見てよ。

僕がしたことを責めてよ。

僕がいることを証明してよ！！

気が付いたら螺子を投げていた。

でもそれは彼女の体をすり抜けていく。

ああ、かなわないなあ。

やっぱり僕は勝てないのかな。

でも、わかったよ君は僕の仲間でもあるんだね。

じゃあ、括弧つけなくても別にいいかな？

「・・・僕が球磨川楔だ。仲良くしてね。」

なんて、今日も僕は嘘を吐く。

全く、とんだピエロだぜ。

でも、好きになれそうさ。

二話目！裏？（後書き）

次回から、安心院さん登場です。

### 三話目！前？（前書き）

今回は前後編となっております。

内容が区切りがついたところを1話としています。

### 三話目！前？

「だけど、僕のことは親しみをこめて安心院あんしんいんさんと呼びなさい」

「いやです」

「『いいよ。安心院あんしんいんさん』」

つかの間の静寂。

あれ、私なんか変なこと言いました？

「球磨川くん、この子はほんとに学級代表なのかい？  
多数決で話題にも上がらなそうな子だけれども」

「『仕方ないじゃないか。この子しかいなかったんだから』」

二人ともひどくないですかね？  
というか、球磨川君はともかく。

「あなたは大変人気の出そうな感じですが。  
こんなか弱い女の子をいじめていいんですか？」

「女の子だったのかい？これは失礼」

「『か弱い（笑）』」

「球磨川君はナイスつつこみ。」

なじみちゃんはちよつと校舎裏に来てください」

「まあまあ、落ち着きたまえよ。」

「……まさか、愛の告白かい？」

「ふざけないでください。キレ、ますよ？」

「『ほら！二人とも、喧嘩は駄目だよ。』

当初の目的を忘れてるよ！』」

いやいや、この喧嘩はそもそもクラスメイト全員不登校にして、いつの間にか学級代表に任命していた球磨川さんのせいでしょう？

「まあ、いいです。」

そんなのなんとも思っていないせんから」

「その割には涙目じゃないかい？」

この人とは相容れません！

（まあまあ、落ち着けよ。）

俺？珍しいですね。

（ん、忠告だ。少しでもその安心院あんしんいんさん

とやらと仲良くしとけ）

いやです。

（忠告はしたからなー、じゃ）

……あ、いまのは普通に念話です。

声には出てませんのであしからず。

「『どうしたんだい？急にボツとして』」

「いえいえ、当初の目的を思い出していただけですよ」

「『ああ、そつだね。僕らの目的は

なんか学級代表とかやつてる幸せな奴を潰す

だったよ、忘れてた』」

「ちよい、ちよい、あんたが忘れてどうするんやー」

はい、棒読みですよ？

なんか、なじみちゃんとあつてから  
テンションがた落ちですし。

そこら辺に転がっている人たちに  
御線香でもあげときましようか、南無。

「『おいおい、彼らはまだ死んでないぜ？

ただちよつと志を折っただけで』」

「そつですよー。自己紹介にいちいち

茶々入れてましたもんね」

あれはいやだ。描写したくないほどだったもん。

・・・最近、キャラが安定しません。

なぜでしょう？とりあえず、閑話休題。

「そつだ、月夜ちゃん。ちよつとお話しないかい？」

「『・・・そんな嫌そうな顔しないで、

僕は先に家に帰ってジャンプを読むとするよ』」



「・・・先週、合併号でしたよ」

「『』なんだって!?!?』」

なじみちゃん、あなたもですか。

### 三話目！前？（後書き）

安心院さんのキャラが・・・。

誤字脱字がありましたら、ご指摘お願いします！

## 三話目！後？（前書き）

安心院さんのキャラ崩壊注意報と百合百合注意報が出ました。  
苦手な方はバツク！！

### 三話目！後？

「安、心、院、さー！ー！ー！ん！」

「え？え？え？」

「やっと会えましたあー！ー！！」

いやー、あつちの世界に居て紙媒体からでしか

拝めなかつた御姿をこうして御目にかかることができようとは！ー！

もう僕、幸せで死にそうです！

ああ、もっと抱きつかせて下さい！

頼ずりさせてください！なめさせてください！」

「誰だい、君は！？」

あ、突き飛ばされちゃった。

うーん、テンションあげすぎたかな？

でも、なんかこんな感じのあいさつがあつた気が……。

ま、いつか。

「いやだなあ、悪平等ほくですよ。  
安心院ほく」

「おや？……確かに、君は悪平等ほくだね。

でも、月夜ちゃんは僕じゃないぜ？」

「うーん、私も僕だからなあ。

でも悪平等ほくではない。

つまり、月夜は私で僕で俺なんですよ」

「意味分かんないよ君・・・」

「よく言われます」

「つまり、三重人格ってわけかい？」

「スキルについては私に聞いてくださいよ。それよりも！僕は何をすればいいですか？」

「そうだね。君は

何もしなくていい」

「えー」

「さっきの月夜ちゃんとはえらい違いだね。

君は悪平等あくへいもどきのようだ。

月夜君、とでも呼ぼうかな？」

「何とでもお呼び・・・って、イタイイタイイタイイタイ」

「・・・なんで自分でつねっているんだい？」

（僕は何しているんですか！早く戻って下さい！！）

「え、とテンションあがって、つい？」

（つい？じゃ、ありません！

5秒以内に戻りなさい。さもないと・・・）

「はいはい。ではでは、安心院さん。  
さよーならー。」

そして僕は言った。

「あ、やっちゃった。」

後で私に怒られるなあ……。

とか思いつつ、薄れゆく意識の中で  
囁いた。

「  
」

多分笑っていたと思うよ。

……安心院サイド……

彼女は自分をつねったと思ったら、  
次は独り言をぶつぶつ言い始めた。  
結構、危ない人なのかな……？  
と、呼ばれたことに気付き顔を上げる。

「  
」

彼女は笑っていて、そのまま意識を失った。  
倒れかけたとき、ちゃんと支えてあげたよ？  
さて、保健室に連れて行くのか？

あ、先生もういないか。

……ん、いいこと思いついた。でも、怒られるかな？

それにしても、顔が熱いぜ。  
笑顔であんなこと言ったら、女の子はみんな落ちちゃっただろつに。  
月夜ちゃん、いや月夜君。

大好きだよ、なんて。

この僕が本気になっちゃうじゃないか。

とりあえず、君は僕にとって特別な子になったよ。

覚悟しておいてよ？

### 三話目！後？（後書き）

あれ？なんか、だんだんハーレム（男女問わず）ができてきてるよ  
うな・・・。

気にしません！月夜にとっていい関係は無関係です！

はい、ごめんなさい。多分会う人会う人こうなるかもです。

むしろこの子は絶対！っていう子がいたらぜひぜひご応募ください。

ああ、テンションにやられてしまった・・・。次回も安心院さんの  
ターンです。



## 四話目！（前書き）

いつもながらの駄文です。それでもOK！という方だけどうぞ。

## 四話目！

「どこですか、ここ・・・」

目が覚めたら、知らない天井とか

そんなのどうでもいいんです！（よくない）

神様の用意してくれた部屋は畳じゃないですし、  
布団でもないのですよ・・・。

「やあ、目が覚めたかい？」

そこに居るのはなじみちゃん。

ああ、だんだん思い出してきました。

あれは僕のせいですね、いきなり交代しようとして  
体に負荷がかかったのですか。

というか過負荷おれがいる時点で

負荷もなんもないと思いますが、デリケートなんですよねえ。

「寝起きはいつもそんな感じなのかい？」

怒ったり、しみじみしたり、ね」

「そんなわけないですよ。

ただ、そのままほっといてくれたら、よかったな。  
なーんて」

「君、ちよつと球磨川君化してないかい？」

「一日中あの人と二人きりでいてくださいよ。

いやでも、嘘をつきたくなりますよ？」

「一日中？二人きり？・・・へえ」

あれあれ、なじみちゃん顔がちよっと怖いぞ？  
やっぱり嘘は駄目ですよね！。  
それよりも、

「ここ、どこですか？」

「僕の部屋だけど」

「だけどじゃないですよ、  
何してくれているんですか」

「おやおや、せつかく運んであげたというのに  
その言い草はないんじゃないかい？」

「うるさいですね。  
私は何とも思ってますよ。  
心配しているのは僕の暴走と」

そして私は眠るように、  
そして俺は憤るように。  
ま、過負荷だから仕方ない。  
マイナス

「俺の短気だよ、なあ？」

「今度は誰だい？」

月夜ちゃん、月夜君・・・。  
月夜、と呼び捨てにでもしようとするかな

「はあ？ふざけてんのかよ。」

さっき言ったる、俺は短気なんだよ」

「怖いなあ。君は過負荷マイナスだね。」

もつと余裕を持ちなよ、損するぜ？」

ああ、ほんと相容れねえ。

私に押し付けようか。

でも、俺から関わったんだ。

後悔させてやんよ。

(駄目だよ！そんなの駄目！)

(あ、僕。今そんなこと言ったら・・・)

「・・・」

「？どうし・・・!!」

殴りかかったよ？

ほんとにさあ、短気だっつってんだろ!!

次から次から、ほんとにほんとに。

俺をそんなにキレさせたいのかよ!!

「落ち着いてください、俺。」

今度パフェでもおごりますから。

球磨川君が」

ギリギリセーフ。

まあ、なじみちゃんを押し倒す形になりましたが。

「これが分かったらなじみちゃん。  
ねえ、なじみちゃん」

そして、にっこりとほほ笑み。

「私とは、無関係で、いましょっつよ」

## 四話目！（後書き）

次回はあの変態さん登場！なるか？

## 五話目！（前書き）

うーん、時間を考えるって難しいですね。  
いつも通りの駄文ですが、よろしくお願いします。

## 五話目！

「『変態仲間ができたよ！』」

「別れてください、早急に」

その後、そのまま家に帰ろうとしたら

迷って、泣いて、結局なじみちゃんと俺のことは仲直りして

僕が暴走して私が嚴重注意して

送ってもらった、雪島月夜です。

はははははー、はあ。

かわいいねえ、月夜ちゃんは。

とか諭されましたけど何か？

これについてはもう水に流します。

水どころか日本海に流して、どこかにたどり着けばいいですね。

あ、たどり着いたら駄目でした。

閑話休題。

さて、教室に入ったら

球磨川君に嬉々として言われました。

「これ以上面倒事を増やさないでください。

私は5月病で死にそうなのでですから」

「『もう8月だよ？』」

「間違えました。

中二病で死にそうです」

というかもう8月ですか。



時がたつのは早いですねえ。

「『そうか、それは大変だね。

安心して！僕はとても解析が得意な仲間を知っているんだ』」

「いやな予感しかしないので、

干渉を拒みます！」

「やあ、呼んだかい？

球磨川君」

なぜ来る……。

やっぱり、真黒君ですか、そうですね。

しかしながら、このあたり。

全くと言っていいほど原作知識が役に立ちません。

せっかく、赤さんのところまで読んだのに……。

球磨川君、裸エプロンはむしろ幼女に……ゲフンゲフン。

ナニモイツテナイヨ？

それはさておき、

「どちら様ですか？」

知っていますけどね。

「僕の名前は黒神真黒だよ。

好きなものは妹で、趣味は妹で、

得意な事は妹だよ」

「さよーならー」

逃げました。全速力で。

そのまま帰宅、今日の晩御飯でも買いに行きましょう。

・・・あ、給食食べ損ねました！

・・・球磨川真黒サイド・・・

「あらら、逃げられちゃった」

「『もう、ところで解析できた？』」

「もちろん、中々かっこいい子じゃないか」

「『うん、そうだね』」

男と勘違いしてるかどうか知らないけどもそれはそれで面白いと思う球磨川君でした。

おまけ

「私はロリコンじゃないです！

ロリコンだとしても、

変態ではありません！」

とある月夜さんの言い訳。

## 五話目！（後書き）

実は月夜ちゃんも変態だというオチともいえないオチです。

## 六話目！（前書き）

えー、前回のロリコンネタを引つ張りました。  
苦手な方は、目隠しをして選管に入るんだ！

## 六話目！

「つまりはですね。」

恋愛に年齢は関係ないという話ですよ」

「あひゃひゃ 何それ、告白？」

なんか同じ勘違いを良くされますが  
あえて言いましょう。

「まあ、そうであるとも言えますかね」

「う、わ！やっぱり？」

告白なんて初めて受けたよ。

面っ白ーい」

はい。雪島月夜（私ヴァージョン）です。  
たった今、ほとんどの方はお分かりになられたと  
思われますが、不知火半袖ちゃん。  
もとい、袖ちゃんとお食事中です。

「ま、いきなり誘拐された時は

びっくりしたけどねー」

「誘拐とは失礼な。」

お食事に誘っただけじゃないですか」

「普通の人には食事に誘うとき、  
後ろから盛大にハグしないと思うけど？」

「それはちょっと気持ちが高ぶっていただけです。  
私はかわいい子の基本的には味方です」

「うっわ、変態思考だね」

あ、今のはグサっとききました。

因みに来ているのは食べ放題です。

ぶっちゃけ、家計が厳しいです。

給食食べ損ねたので夕食をがつり行こうと

ここに来たら、袖ちゃんに会いました。

ハグはまあ、挨拶ですよ。

「それにしても、

子供が一人とは危ないじゃないですか。

本当の変態に会ったらどうするつもりですか」

「人のこと言えないと思うし、

変態というのを地味に否定してるけど

断言して、あなたは変態です」

「罵倒＋敬語ですか・・・。

そういうえば、私のほうが先輩でした。

ということ、先輩って呼んでください」

「あ、今私の中で

あなたには敬語を使わないことに決定したよ」

「むう、じゃせめて名前で呼んでください。

そしたら、また食べ放題限定で奢ります」

「ほんと？じゃ、月夜  
これメアドね、食事のお誘いのみ受け付けるよ  
じゃね〜」

「はい、さようなら」

ああ、これで携帯のアドレス帳に  
また一人増えました。

え、今ですか？

・・・袖ちゃんを含め、三人ですが何か？  
なじみちゃん一件と球磨川君十五件。

何個携帯持っているんですかね？あの人。

登録に飽きて途中のままですよ。

ま、そろそろ私もおなかいっぱいになりましたし、  
帰りますか。

「やあ、月夜ちゃんかな？今は」

「なんですか、なじみちゃん。

後、後ろの球磨川君と・・・

誰でしたっけ？」

「真黒だよ！もう忘れたのかい？

全く、僕は『チエックメイトマジシャン理詰め魔法使い』と」

「ああ、マグロンですか。

よっ、大トロ！」

「月夜さん、僕に対して冷たくないかい？」

「馬鹿なこと言わないでくださいよ。」

マグロンに冷たくしてるなんて、ありえませんが」

「特にその、マグロンだよ！」

「真黒君が突っ込みになるなんて・・・」

「『あはは、面白い面白い』」

まあ、とりあえず  
帰りましょうか。



## 六話目！（後書き）

次回は急展開予定です。ええ、毎回ゆったり会話ばっかしてすみません。

七話目！（前書き）

話を進めるスキルを、誰か、ください……。。

## 七話目！

「ついに二年生ですか・・・」

あれ？さっきまで一年生だった気が・・・。

気のせいですよ。きっと。

球磨川君がクラスメイトを不登校にしているから  
そう感じてしまうんです！

普通に1年1組はなかったこと扱いですよ。

気を取り直しまして、2年1組！

クラスメイト、球磨川君！

オワタ＼（＾o＾）ノ

同じルートじゃないですか。

なじみちゃんも、マグロンも

違うクラスなのですよ。

しかもこの学校、二年から三年はクラス替えがないそうぞ。

はは、もう一度言います。

オワタ＼（＾o＾）ノ

私は曲がりなりにアフノーマルにも異常ですから

友達とか欲しいんですけどね。

ま、戯言ですが。

「『あ、月夜ちゃん。ちょっと来てー』」

「？はい、なんででしょう」

ドアから出た瞬間。

頭に鋭い衝撃が、というか痛い。

フラフラするし、立ってられません。

「この子でいいんですか？球磨川さん」

「うん。それにしても」

女の子とか関係なしだね。高貴ちゃんは」

「女だったんですか・・・」

あー、阿久根君ですか。

プリンス君。あと、さらっとひどいこと言うなあ！

・・・取り乱しました。

「ずいぶんと、嫌われたものですね。

月夜<sup>わたし</sup>」

「いやいや！君を嫌ってこんなことしたわけじゃないよ。

高貴ちゃんのテストと、後はまあ月夜ちゃん的能力テストと

僕の心のテストだよ」

「テストがそんなにあるとは、

春から憂鬱ですね」

「お前、なぜしゃべれる・・・」

「はい？あー、私の代わりに自己犠牲（故意にやらせた）

してくれた人が一人いるんですよ」

（なあ、私？僕が動かねえんだけど・・・）

痛みだけをそっち飛ばしました！。

私は悪くない！

「『前みたいにごう、すり抜けさせたりはしないのかい?』」

「俺がもう出たくないそうなので無理です。

というか、体が動きません。

とりあえず病院に連れてってください。

あ、そうそう。阿久根君改め高貴くん。

仲良くしてくださいね。

あと、先輩呼びで

「・・・」

「『いいよ、高貴ちゃん。

仲よくしてあげて』」

「分かりました。

此方こそよろしく願います。

雪島先輩」

「はい、よろしく願います」

えーと、この後めだかちゃんが入って、

高貴くんが改心されて、

なじみちゃんが顔はがされて、

球磨川君が消される、と。

どこまで原作どうりに行きますかね?

私は地面に這いつくばったまま考える。

## 七話目！（後書き）

そして、病院には結局マグロンが通りかかるまで行けなかったそうです。

## 八話目！（前書き）

いつもながらのマイペース注意です。

## 八話目！

わーい、楽しい楽しいお食事会だあ！  
なんて、思えるはずがありませんよ……。

「『あ、それいいな。高貴ちゃんちようだい！』」

「言いながら、もうとってるじゃないですか……」

「確かに、それどこにあつたんだい？」

「ああ、僕もさっき見たよ。

おや？月夜ちゃん、あんまり食べてないね。

こういうのもなんだけど、

食べ放題なんだから、食べたもん勝ちだぜ？」

「あなた達が食べすぎなんですよ……。

球磨川君、その食べ方はやめましょう？」

ああ、どうして休日にこうなったのか。

きつとあのメールのせいでしょう……。

……回想……

「今日も俺はすねてますし、

僕のはっちゃけてますし、

あ、そうだ。袖ちゃんと食べ放題に行きましよう！」



思い立ったら、即行動。

この前の約束の食べ放題に行きませんか、と。

・・・お、返信来ました。

(『やつほー、月夜ちゃん。』)

『でも、なんか約束してたっけ?』)

おやおや?これちょっとひどくないですか。

約束していなかったら、メアドも交換していな・・・

ん?月夜、ちゃん?』?

・・・恐る恐る、宛名を見てみますと

ての 球磨川君

操作間違えました!!

どうでしょう・・・。間違えました、というべきですかね?

いや、あの人のことです。

何を言ってくるか・・・。

いえ、正直に言いますよ。

(あー、すみません。)

実は、他の友達に送ろうと思っていて

間違えました。本当にすみません>m( )m<( )

(『うん、わかった。』)

『ところで友達つてのは誰だい?』)

もちろん袖ちゃんのことですが、

あの人、まだ知らないはずです。

どうすべきですかね。

( またもすみません、

プライバシーのようなもので・・・( ー ー ) )

( 『そっか、性別でもだめ?』 )

( まあ、そのくらいなら。

女の子です。かわいいですよ )

( 『へー。あ、そっだ。』

『その子とはまだ約束してないんだよね?』

じゃ、一緒に行こうよ。中学に近いのところでしょ?』

『友達も誘つとくから。』

あ、あとさつきから送信失敗ばっかしてて、

ちよつと電源切るから、拒否権ないよ。』

『じゃ、12時に。来なかったら、安心院さんにいろいろチクるから!』

『バイバイ』 )

どの道、このルートに変わりなかった気がします・・・。  
それでは回想終わります。

・・・球磨川サイド・・・

うん。最初はちよつと強引かな?

とも思っただけど( 嘘 )

楽しそうにしているし、僕も楽しいし。

ずっと一緒にいてくれたし、僕を否定しなかったし、

ま、肯定もされてないけれど。

そろそろ僕は、過負荷卒業かな?  
マイナス

そつだな……。僕を改心させようと頑張る子が出たら嘘をつかず、本音で、抵抗しよう。

うん、まあ、戯言だね。

そんなことでできてたら、とっくのとうに改心してるよなあ。

そう簡単に僕が人の不幸にすぎらなくてもいいように、なんて。

・・・月夜ちゃんなら、できるかな？

「球磨川君、わたあめ作りません？」

・・・幸せそうな顔しちゃってさあ。

でもあの時見た顔は、俺って言った時の顔は、まさに同類だ。マイナス

あれ？なのになんでこの子病院にならともかく、

僕の集めたデータにすら入っていなかったんだ？

あれも、完璧ってわけじゃないけど、

おかしいな……。

うん、どうでもいいや。

今は

「『いいね。周りにレモン掛けまくって

高貴ちゃんと真黒君に渡そうぜ』」

この、幸せごっこを楽しもう。

・・・月夜サイド・・・

はい、振り返ってみますとこれはこれで、

楽しかったですね。（素知らぬ顔で）

あのマグロんの顔と言ったら……。

思い出すたびに笑えますね。

高貴くんはマグロんに渡してました。

……惜しかったです。

今まで、作りませんでしたけど、

友達っていいものなんですね。

ですが、やはり、

一番は無関係です。これだけは譲れません。

明日も休みですし、

袖ちゃん、誘いますか……。

## 八話目！（後書き）

ああ！学校が始まってしまった・・・！！  
というわけで更新速度が落ちます・・・。

## 小話目！（前書き）

えー、はい。いつもながらの駄文アノド内容なくね？ですが、よろしく願います。

## 小話目！

えー、見事に袖ちゃんに振られてしまったので、  
（家族で食へに行く予定があつたそうで）  
ここで少し、私の昔話でもしようかなと。  
お前の過去なんて興味ねえよ！って方も  
そこを抑えて聞いてもらえますと助かります。

私が無関係がいいと言っているのは、  
別に親友に裏切られたわけでも、  
親に身売りにされたというわけでもありません。  
ただ、幼稚園の時にトラウマがあるだけです。  
入園式、たくさんの園児たちがもちろんのようにいます。  
その光景を見た私は、異常だったからか、ただただ  
コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ  
ナニコレ？ニンゲン？ナニコレナニコレ、コワイ！！  
と思いました。

次の日には不登園ですよ。関わりなくなつたんでしょうねえ。  
親に対しては、大丈夫でしたけど。

はい、その後、  
俺と僕が私の中に生まれて何とかなつたと。  
え？はしよりすぎですか？

しかし私は、中学生まで引きこもりですよ。  
話すべきことなどありませんし、  
私の異常は幼稚園アブノーマルの時にはありましたが  
同じく中学生まで気づきませんでした。

俺と僕が生まれたときに何があつたということもありません。  
思い返してみますとつまらぬ人生ですね。  
週刊少年ジャンプだけが生きがいだったと。

あ、こつちの世界でもジャンプありますよ？

『めだかボックス』が『落ち込め！ネガ倉くん』  
になってますけどね。

話がそれました。

えーと、あれです。

あ、なじみちゃん！ちょうどよかった。

いま、ラジオ取っているんです。なんかしゃべってください！

と、いうわけで

僕にバトンが渡されたわけだけでも。

うーん、何しゃべろうかな？

あ、そうそう。

月夜ちゃんについて話そうか。

今、ちよつと席をはずしているわけだし、

あの子照れるとそっぽ向くけど、顔が真っ赤だから  
すぐわかつちゃうんだよね。かわいいだろ？

主にいじっているのは僕と球磨川君だけでも。

ん。今ので、とあるエピソードを思い出したよ。

あの子が僕の家に来たことがあるんだけどね？

本っ当に！些細なことで喧嘩をしてしまったんだよ。

そのあと、彼女は怒って帰ろうとしたんだけどね、

悲しきかな、帰り道なんてわかるはずもなかったんだ。

うーん、こういうと僕が拉致してしまったみたいに聞こえるけどね。

ま、そうとも言えるのかな？ご想像にお任せするよ。

で、それに気付いた僕は追いかけて行って、

なんとか見つけて、声をかけたら、

振り向いたところ彼女は、えと、まあ、

涙をぼろぼろ流していたわけで。

そこから面白くてね？



「泣いてません！」

迷子とかじゃありません!！」

って、ずっと言い訳を続けていたわけさ。

・・・おっと、そろそろ月夜ちゃんが帰って来るね。

最後に一つ。これはその時気付いたんだけどね。

彼女の能力は『スキル風景<sup>エキストラ</sup>』。

それに派生してまだ何かあるみたいだけど。

他にも何かあるみたいだぜ？あの子自身、気付いてないみたいだけれども、ね。

小話目！（後書き）

次回は王子様回で行きたいと思います！

## 九話目！（前書き）

テストエ・・・。

今回は会話ばかりです。

## 九話目！

「月曜日ってジャンプの発売日ですし、学校とか、なくていいと思うんですよ」

「それは今言うことですか？

雪島先輩」

「そう言わないでください。

高貴くん、後、足よけてください。  
痛い痛い」

おおつと？逆に力が増しました。

周りに人はいませんが、助けを呼ぼうにも  
呼べませんねえ……。

あれ、死亡フラグ？

ああ、頭が痛いよー。

ま、どうでもいいことですが。

「さて、高貴くん。

なぜ、あなたは、

私を、壊すのでしょうか？」

「……別に、理由なんてありませんよ。

ただ、イライラしていただけです」

「それは休日明けだからです。

朝一でジャンプ買って読めば、すべて解決です」

「あなたの理論は、  
よくわかりませんね」

「あなたがイライラしているのは、  
打ち込めるものがないからですよ。  
・・・ふむ。友達のことですし、  
少しなら相談に乗りますが？」

「俺がいつ友達になっただんですか？」

「私の基準では、  
無関係の人は他人。  
関係ある人は友達。  
となっておりませんが、何か？」

「俺は、あなたが分かりませんよ。  
それに、俺には何もありません」

「それでしたら、球磨川君は君にとっては  
何でもないんですか？  
そういう考え方もありますね。  
関係があっても、無干渉。  
好きの反対が無関心とはよく言ったものです。  
さて、ここで提案です。  
あなたは私の友達になりませんか？」

「どうなったらそこに行きつくんですか・・・。  
ひとつ言わせてもらいます。  
俺に何かができても壊します。  
どうやったって壊れないものなんてないですよ」

うーん、ここで破壊臣をやめていただくというのもありますが、そうすると、原作が大きく変わってしまいます。あまりそういうのは望んでないんですね。と、いうわけで高貴くんの友達になるう作戦は周囲に影響を与えない程度に……。血が流れすぎてて、考えられません。どうにでもなれ！です。

「そうですね。壊れないものはないかもしれませんが。しかし、あるかもしれない。そこは置いときまして、友達になりましょう？」

「あなたは何を聞いていたんですか。壊しますよ？」

「いいじゃないですか。破壊臣、大いに結構！で、だからなんです。友達になってくれないんですか？」

「血まみれで涙目は効果ありませんよ。壊していいんですか？」

「さつきからそればかりですね。あまり壊れたくないですが、友達のお願いは聞く物らしいですし、壊れても直せばいいですよねー」

「……不思議な人ですね。あなたは」

「はい、よく言われます。」

それでこっちからのお願いです。  
壊したら、病院までおんぶしてって下さい。  
いいですか？」

「分かりました」

そういうと高貴くんは私をお姫様だっこし、  
つて、あれあれ？

「高貴くん？」

「友達に頼まれたら、  
それ以上のことをやるべきかな」と

「・・・そんなんだから18位なんです」

「？なにか言いましたか？」

「いえ、何も」

いろいろ失敗した気もしますが、  
まあ、いいでしょう。

高貴くんも笑っていることですし、  
病院にも行けますし、ね？

九話目！（後書き）

えー、また時が飛びます！



## 十話目！（前書き）

テストが終わりました！  
しかしながら、行事エ・・・。

## 十話目！

ついに、受験生、です。

来てしまいました三年生。

しかし！私は、高校に行きません！

高校になんかいったら、原作介入たくさんしちゃうじゃないですか。今でさえいろいろやっちゃってますし、

これからはアルバイトして暮らしますよ。

と、言うわけで求人情報誌！！

「『あれ？月夜ちゃん、働くの？』」

「はい、まだ先の話ですがね」

「『へー、じゃあちょっと僕の元で働いてよ。』」

もちろん学生の身分だから給料は出せないけど、

そうだね。カフェくらいはおごろうか？』」

「・・・ふむ。条件としてはなかなかですが、

何をしろと？」

「『生徒会に入って？』」

「却下」

えー、なんでー。と騒ぐ球磨川君は放置です。

というか忘れていました、生徒会長になるんですよね。

これ以上は踏み込めない領域になっています。

私はあくまでも、平和的にやって行きたいですから。

「そんなに面倒なことはいやです。  
しかしながらそうですね、高貴くん  
5日に一回のペースで私を破壊するよう  
にいうのやめてもらえませんか？」

実は今、結構包帯でぐるぐる巻きです。

「『何を言っているんだい。』

僕がそんなこというわけないだろう？。』」

「じゃ、彼個人の判断だと？」

「『本当は1日に5回のペースだよ』」

「なおさらひどいですが……？  
結局、どうなんですか」

「『1日に1回のペースにしようか？』

それに、パフェつき』」

「……うーん。」

そうですね。俺の機嫌もとりたいですし……。

(仮)とかはどうですか？」

「『(仮)？あはは何それ(笑)』」

「ええ、生徒会役員(仮)です。」

手伝いくらいはしますが、責任は持ちません」

「『うん、いいんじゃないかな？  
はい、サイン頂戴』」

落書き帳に生徒会役員（仮）とあり、  
ザ・手書き感抜群です。

「はいはい」

「『うん、オツケー。』」

これで会計ゲット！『』」

「最低だこの人」

いやね？下にカーボン紙があっただんですよ。  
さすがというべきかなんというか。

「『僕に安心院あんしんいんさんに高貴ちゃん、真黒君。

そして、月夜ちゃん！完璧だね！！』」

「すぐさま、リコールさせられそんな生徒会ですね」

というわけで、生徒会始動！！

な、訳ないですよ!!

「『あー!!--何するのよ!!--』」

「しるたにです。しみは燃やしましよ」

追記・会計不在。

## 十一話目！僕の前？（前書き）

最近気づきましたが、原作入ろうと思いつつもう十話超えましたね。  
。。。

## 十一話目！僕の前？

さてさて、今日の主人格は僕だよ！  
といっても、月夜には変わりないけどねー。  
ま、分けわかんなくなるし学校へいこつと。

・・・

ついたー、実は今僕が着ているのは学ランだよ。  
何か女の子の視線が気になるけど気にしない！  
さて、安心院あんしんいんさんに会いにいこつかな？

「『ヤッホー、月夜ちゃん何やってんの？』」

「んー、あ、みーたんだあ。」

僕は安心院さんに会いに行くところだよ

「『・・・あ、そうか。」

前もあつたなうん。

えーと、キャラを変えるときは一言言ってほしいな』」

「ん？キャラ・・・ああ。」

簡単だよー。

このピョンってなってるのが、

二本なら僕。

一本なら私。

真っ直ぐになってたら俺なんだよ！

すごいでしょ？」

「『すごいかどうかはともかく、理解はしたよ。」

そうそう、黒神めだかって知ってる？

おてんばな子で高貴ちゃんに壊してもらおうかと思っただけど  
どっと思っつ？」

「どっも思わない！」

て、ここで安心院さんに会ってくるよー」

「『そっか、じゃあね』」

「ばいばーい、みーたん！」

「『もしかして、マグロンの名づけ親って・・・』」

僕は何かいつてるみーたんをそのまま、  
ダッシュ！

早くあいたいなあ・・・。

・・・

「うう、君は何か僕に恨みでもあるの？」

さすがの俺でも無関係の人は殴らないよ？」

「雪島先輩、キャラ変わりました？」

それに、何ですかその学ラン」

「これは僕の趣味だよ。」

かっこいいでしょ！」

「・・・はあ。」



あ、そろそろ病院行きます?」

「ん、このくらいなら大丈夫かな。

それより、こうちゃん。

腕、怪我してるよ」

「え、あぁどこかで切ったんでしょうね」

「へー、ちよっと貸して」

ぺろっ

「……!何してっ……」

「何って、治療?」

「お、俺は先に帰ります!」

「ばいばーい」

さて、次こそは!

...

「迷った……」

嘘だ……そんなに僕は方向音痴じゃないぞ?

この前も駄菓子屋から家まで2時間で帰れたし!

(五分でつくところでしたけどね)

私!うるさい!

「うう、泣きそう・・・」

「おや、また迷子かい。

月夜・・・君？」

「安心院さん？」

あうー、よかったです・・・。

やっとお会いできました！

なでなでして、ほめてください！！」

「よしよし。それにしてもよく月夜ちゃんが、  
月夜君を出したね。何かあったのかい？」

「さあ・・・。私の考えていることはわかりませんよ。  
あ、そうそう忘れてました。

僕に、悪平等ほくの仕事いただけませんか？」

十一話目！僕の前？（後書き）

月「そういえば、私の名前って雪島ですよね」

シ「そだよ？」

月「九州の地名に雪島ってありましたっけ」

シ「え？」

月「え？」

シ「というわけで小ネタもはさみつつやっていきたいと思っ  
ていますので、

これからよろしくお願いします！」

十二話目！僕の中？（前書き）

いつもながらの駄文です。  
そして主人公が暴走です。  
そして原作に入れません。  
二十話までには・・・！

## 十二話目！僕の中？

「うーん、ほんとに今のところ

仕事がないのだけれども、欲しいのかな？」

「欲しい！ちよーだい！」

「・・・」

「あう・・・」

「ごめんなさい」

「いや、謝らなくていいんだけど。

何でそんな急に？」

「えっとー、私が働き始めてー、

俺も時たま手伝っただけど、

僕は何もしていないから、私が今日は僕でいいよって、  
いってくれたんですー。」

「素晴らしいっちゃやこしいね。

まあ、いいけど。じゃ、じつじつ。

ほかの僕に会ってきなよ。

何かのためになると思うぜ？」

・・・

と、いうわけで来ました！

一桁女子中！！

うん……。ただでさえ学ランで目立ってるのに、女子中って……。

視線が痛いよー。早くここから去りたいよー。

でもでも、だめだめ！

早く悪平等を探して、勉強しないと。

せつかくもらった仕事なんだから。

(だから、言ったのです。学ランはやめなさいと。私が出ますか?)

(いやー、こんだけ目立ったらむりじゃね?)

「私が、ここに来ようって言ったんじゃない！  
後、俺は何もしてないし……」

(別にい、俺は過<sup>マイナス</sup>負荷だし?)

「みんなキャラ統一しようよ……」

(それより、早く財部ちゃんを探しましょう!)

「(それが、目的か!!)」

(それ以外にここで何をしろと!?)

「逆切れ!?!?!?!でも、まだ入学してくない?」

(あ。

……可能性は捨てられません!!)

「あ。って言ったよね今!

て、あ。」

今までの声に出てた？

(出てました)

(出てた)

「うわぁ・・・」

視線が痛いよー。

さっきの3倍くらい痛いよー。

でも、何でこういうときに限って悪平等が見つからないの!?!  
もうみんな帰ってるのかな・・・。

「あの・・・何しているんですか？  
悪平等ぼく」

!?! やつと見つけた!!  
つて、財部ちゃん？

「これはこれは、失礼しました。

私の名前は雪島月夜、と申します。

以後お見知りおきを・・・」

「え・・・あれ？」

(私—————!!)

「いやー、まさかこんなにかわいらしい  
お方に会えるとは痛いです、僕。」

わかりました。変わります戻ります。  
頬をつねるのはやめてください」

「この前のお返しだよ！  
大体何やってんの、今日は僕のターン！！  
全く・・・」

「（何だこいつ？頭がおかしいのか）  
え、と。あなたは悪平等ですか？」

「んー、そうだけど。  
ぶっちゃけモドキ的な感じだね。  
さっきのは、気にしない方向で！  
えーと、名前は？」

「あ・・・」

普通に目を逸らされたよ・・・。  
私のせいだ、馬鹿馬鹿！

（それ以前の話だと思っただが。  
やりかましてたし）

・・・僕の馬鹿あゝ。

「いやならいいんだよ。  
どうせ僕は最初からだめな子だし。  
スキルなんてないし、悪平等という個性も、  
なんかあやふやだし。  
すぐに何でも声に出しちゃおうし。」



よく私にキレられるし。  
俺にはスルーされるし。  
失敗だってたくさんしてるし。  
というか成功したことあったかな・・・。  
はは、本当に何も無いや・・・。  
どうせ」

「財部です！財部衣真です！！  
大丈夫、あなたはできる子だと思いますよ！」

「そうかな？」

「そうです！」

「・・・ありがとう！！」

十二話目！僕の中？（後書き）

月「なんか切り方雑ですね」

シ「こう、長い話をいつ切ればとか、  
わからない気がするけど」

月「プロットでも作ればいいじゃないですか」

シ「え、これその場のノリと勢いで書いてるよ？」

月「では・・・」

シ「うん。ぶつちやけネタ切れになってきた」

月「馬鹿ですかあなたは。」

「というか馬鹿ですね」

シ「え、と次回は僕の話のラスト！

楽しみにしてくださいー！」

月「あ、逃げた」

## 十三話目！僕の後？（前書き）

なかなか、学校関連が忙しく・・・。  
ちよっと息抜きして、違うのを書いてみよっかとも思いつつ。

### 十三話目！僕の後？

「ありがとう！！」

僕は盛大に抱きついた。

そして、

「（死ね、この変態野郎！！）  
きゃあああああ！！」

盛大に殴られた。

「ぐふっ！」

あ、死んだ。

・・・

「ひどいよ、ひどいよー。」

僕はただ単にハグしただけなのに殴るなんてさー」

「ハグしただけって何ですか！

わ、私は異性に抱きつかれたの初めてなんですよ？」

「ん？衣真ちゃん、男の子だったの？」

「へ？」

「・・・」

「（まさか、こいつ女か!?!）  
え」と、大変申し上げにくいのですが、  
男性の方では……?」

「ないよ?」

「で、でもその制服は?」

「手作り! コスプレだよ!」

「そう、ですか」

「うなだれた衣真ちゃん、かつわい!」

よし、僕がなでなでしてあげよう!」

なでなで。

「……もう、いいです」

「そう、すねないですよ!」

今日僕がここに来たのは、  
君に会うためなんだから!」

「（ははははあ!?! 何言ってるんだこいつ!?!）  
そう、なんですか?」

「そうなんです!」

……あのー、衣真ちゃん?

さっきから、こいつは女って連呼してるけど

そんなことしなくても、僕は女だよ？」

「(やばっ、声に出てた!)  
いえ、気にしないでください」

「そう?あ、そういえば今日はどうしてここに居たの?  
まだ、入学してないよね?」

「今日は学校説明会があったので、  
そういうあなたは、私に何かあるんですか?」

あ、だから私服だったのかー。  
今の衣真ちゃんの格好!

帽子なし!めがね!ワンピース+パーカー!  
以上!  
それより!!

「ん?何しに来たんだっけ、  
忘れちゃった。

ま、いいや、ね、衣真ちゃん」

「・・・なんですか」

「ハグしていい?」

「だが断る!」

「衣真ちゃん、キャラ!

そんなこと言う子じゃない!!  
落ち着いて、深呼吸!

・・・落ち着いた？」

「はい、失礼しました。では、

(そんな冗談やめてくださいよ。)

はい！お願いします！！」

「じゃ、遠慮なく」

「違います、間違えました！

線引き間違えました！！

何言つてんだ私は！」

「はいはい、衣真ちゃん落ち着いて。

深呼吸、深呼吸。

というか、そんなにあわてるなら、

そんな冗談やめればいいのに。

僕は、人の嫌がることはしないのだ！」

「(冗談ではないです・・・)

はは、そうですね」

「んー、そだ。

これ、メアド！またいつか連絡しようね」

「え、あ、はい！」

「じゃあ、バイバイ」

「さ、さようなら！」

・・・

「はあ、出れるに出れませんでした」

はい、私です。

財部ちゃんに会えたというのに、

僕があんな感じだったから・・・。

むう、

「まあ、悪平等は悪平等同土惹かれるものもあるのでしょうかね」

そういえば、そろそろ高貴くんが改心される頃ですかね？

なんてことを思いつつ、

「少し歩きますか・・・」

帰り道。

そこで、私は、主人公と出会った。



十三話目！僕の後？（後書き）

僕編終わりましたー！

次回、やっと主人公登場！！

## 十四話目！

いやあ、偶然って言うのは  
いいことだったり、悪いことだったり、  
本当にうざりたい。

偶然、お金を拾った。

偶然、エロ本を買うところを見られた。

なんてことは、もう全部この世界に必要な気がするんです。  
ま、私は『風景』<sup>エキストラ</sup>で

極力そういうことは避けていますが。

しかしながら、運が悪い。

さっきまでいたのは私ではなく、僕だったのだから。

「ふむ、貴様が雪島三年生だな？」

噂はかねがね聞いておるぞ」

「聞かなくていいですよ。

はあ、めんどくさい。

無関係がよかったのですがねえ」

「何を言う、と、

その前に自己紹介だな。

黒神めだかだ。

しかしながら、雪島三年生 . . .」

「はい、ストップストップ。

おでこ出してー」

「む？」

私は素直に出したおでこに、  
でこピンをした。

「・・・何をす・・・っツ!!」

「すみません。能力の応用です。

人は、当たり前前はことはすぐ忘れます。

なので、ここで会うのは当たり前前、という風に

少々強めに打たせてもらいました。

ちよつと痛いかもしれませんが、

何卒、ご容赦ください」

「・・・ふう、すまなかつた。

ここで会うのは当たり前前だったな。

なのになぜ、私は呼び止めてしまったんだらうか？」

「気にしないでください。

よくあることですよ、では」

私はそのまま立ち去ろうとしましたが、

「待て」

「・・・なんでしょう?」

「ふむ、おかしいな。

なぜか話しかけてしまう。

どうしたものだらうか」

あー、これはやばいかもですね。  
さすが主人公といつかなんと云うか。  
能力の効きが悪いというか、疑問を持つ時点で終わってますよ。  
むう、どうしたものでしょうねえ。

「おーい、めだかちゃん。

どうしたんだ？」

「む、善吉か。いやなに、なんでもないよ」

「そうか？んじゃま、帰るか」

「いや、待ってくれ・・・ああ。

なんでもない、行こう」

「？ああ」

はい、ありがとうございます。

オールバックの善吉君。

まったく似合ってますね。

私ですか？私は即効で逃げました。

ま、同じ学校なんですけどねえ。

球磨川君が会長になってますし、

同じクラスで何かかんか噂がたってますし。

笑えない噂は、ちょっと潰してますけど。平和的に。

お話をただけですよ、はい。

と、メールですか。

（ 『明日、手伝って欲しい仕事あるから』 ）

明日も学校です。

十四話目！（後書き）

月「俺の出番なくね？」

シ「過負荷編入したらね？」

十五話目！（前書き）

いつもより少し短めです。  
いつになったら、原作へ？

## 十五話目！

さてさて、ここは絶賛義務教育的な学校ですよつと。脱ゆとりー、脱ゆとりーなんて言ってますけどね。ゆとれない奴が詰め込めつかー！て話なんですよ。え？何が言いたいかつて？

「死ぬ・・・死ぬますよコレ・・・。  
もうやだ帰りたい・・・。」

「ほらほら、あと2317枚だよ。  
頑張りたまえ」

、なじみちゃんや、それは頑張れませんよ、普通。

「『あはは、頑張れー』」

「黙れ、みそぎんちゃく。  
僕が考えたニツクネーム？より」

私的には「みーたん」よりも気に入っていたり。

「『ひつどいなあ、月夜ちゃん。  
僕はただ仕事をしてもらってるだけなのに』」

「ま、それが球磨川君のやるべきことなんだけどね。  
はい、がんばって」

「マグロン・・・。」



後は頼みました、では」

猛烈ダツシユ！！

・・・で。

「うわ！」「へっ？」「

どすん、と倒れました。ええ、私が。

そして、睨みつけるように、というか睨みつけて。

「どこ見ているんですか、高貴くん。

キレますよ？」

「・・・前を見てなかったのはあなたでしょう。

それに、涙目でそんなこと言われても」

「それは言っちゃダメなんです。

睨みつけてしか言っただけなのに！」

まあまあ取り乱して、後方確認。

追いかけてきてはいない様子！

さあ、どうする！？

「・・・高貴くん」

「なんですか？」

「とりあえず鉄パイプから手を放し、  
しゃがんでください。

・・・手を放すだけでいいんですよ？

何を振りかぶってんですか。  
大丈夫ですよ、これからすることは、  
しっかりと『風景』<sup>エキストラ</sup>を発動しときますから。  
さ、しゃがんでください。  
そうですね、もう少し低く。  
はい、ありがとうございます。  
それでは……」

私は高らかに叫んだ。

「高貴号、発進！！  
行き先はとりあえず保健室！」

高貴くんにおんぶされたまま。

……戻って、生徒会室……

「『なんか、楽しそうな予感』」

「そうかな？ 僕的にはなんか  
人一人殺さなくてはいけない予感がするけども」

「二人とも手を動かしてほしいな。  
合計、あと6532枚だからね？」

「『……はい』」

十五話目！（後書き）

少々ペースダウンします、忙しいといっただらねる時は  
あんま忙しくないんだろっなあ。

## 十六話目！（前書き）

さてと、みんなのキャラがなかなかぶれます。あと、グッドルーズ  
ー球磨川が早く読みたいです。

## 十六話目！

「ところで、高貴くんは何してたんですか？

さぼりだったら、真面目になじみちゃんに報告した後、嘘を混ぜてみそぎんちゃくに伝えて、

妹に手を出したってマグロンに言いますけど」

「最初はともかく、最後は絶対やめてください。

というか、みそぎんちゃく……？」

「球磨川くんのことですよー。」

さてさて、保健室はあつちですよ。

あ、急ぎの用事ですか？」

「いえ、しかし、先にそちらを終わらせていいですか？」

「ん、まあいいですよ」

もうなんだか原作にかかわらないなんて、言えるわけないですし。

という本音を胸に、さて何をしに行くかは

大体予想はつきますがね。

だって、この前僕のとくにみそぎんちゃくが言ってたし。

さてと、ドアガラガラ〜。

そして、近づいて。

鉄パイプでドカン！って……。

あれ？さっき置いてきましたよね??

というわけで？私を背負った阿久根高貴くんは、

黒神めだかに近づきこう言い放ちました。

「球磨川さんがお呼びだ」

「……まずは名乗ったらどうだ？」

「……」

うん、あれー？こんな展開ありましたか？

ここ近づいてボコつてましたよね……。

もう現作離れですか、ま、いいですけど。

……どーでも。

「そう仏頂面をするものではないぞ。

雪島三年生」

「あなたに会わなかったらとても笑顔でしたよ。

まあ、嘘ですが」

早速『風景』エキストラ 頑無視ですか、そうですか。

「雪島先輩、知り合いですか？」

「いいえ知りませんよ。

こんな怖い人のことなんて

用はすみましたよね。速やかに去りましょう。

あ、あと、黒神めだか」

「なんだろうっか」

「一番いい関係は無関係で、

それが私の幸せです。ドウユウアンダスタン？」

「・・・理解できんな。私には」

「そうですか。ならいいです。

行きましよう、高貴くん」

そのまま私達は一年生の教室を出ました。  
で。

「なぜついて来るんですか。

黒神さん・・・」

「ん？球磨川とやらが呼んでおるのだろう？」

「・・・ツインテが果てしなく似合いませんね」

「そういえば、用を聞いてなかったな。

阿久根二年生」

「又ルーですか、とうか高貴くんのこと

知ってんじゃないですか。・・・もうこの子やです。

友達になれません」

「・・・雪島先輩、そいつと仲がいいですね」

「どこがですか、全く・・・」

と、ここで高貴くんの表情が硬くなり、

「あの、俺らと無関係がいいと思ってたり、します?」

「・・・」

さて一考。ま、考えるまでもありませんね。

「友達は、例外です」

とまあ、なんとかかかるとか。

あの修羅場、生徒会室に戻ってきました。

パーティー

黒神めだか 阿久根高貴 装備・雪島月夜

装備ってなんだ、装備って。



十六話目！（後書き）

シ「そういえば、アニメ化おめでたいね」

月「そうですね。みそぎんちゃくはどう表現されるんだか」

シ「かつこ僕は悪くないかつこ」

とか口で言っくんじゃない？」

月「それはない」

十七話目！（前書き）

いやー、主人公が勝手に動き始めますねえ。

## 十七話目！

さあ、つきました。生徒会室。  
この先には何が待っているのか……。  
じゃ、そういうことで。

「帰ります」

「どうしてそうなるんですか」

「えー、だって私黒神めだかが怖いですし。  
めっちゃ帰りたいです。  
おろしてください、マジで」

「はぁ……。わかりましたよ」

やった！これで帰れるグツジョブ高貴くん！！  
と思いつつ、敬礼！

「それでは、帰ります！」

「俺はいいですけど、後ろの方は？」

「ダメに決まっておるだろう」

・・・真似されてました。  
はいはい、行きゃあいいんでしょう！  
行けば！！

「『ヤッホー、月夜ちゃん』」

「やあ、月夜ちゃん。

できれば助けてほしいんだけど」

「・・・何しているんですか？

私には楔くんがなじみちゃんを押し倒しているように見えるのですか。

マグロンはどこですか？」

現在の状況！

楔くんがなじみちゃんを押し倒してます。

そこにやってきた私と高貴くんとめだかちゃん。

さあ、どうする？

「安心院さんから離れろお！！

この・・・バカア！！」

アンサー、僕が暴れだす（笑）

「『え、ちよ、待つて。

勘違いしてるよ、君。

僕は悪くない！』」

「なにが、勘違いだ！

こ、の・・・ばかばかばか！！」

「『それしか、語彙がないのかい？』」

「ムツカ〜！

僕を馬鹿にしてるでしょ！」

「『してるけど?』」

「それくらいにしたほうがいいぜ、球磨川君。  
あとそろそろ降りてくれないかい？」

「はあ、僕もそれくらいにしてください。

高貴くんはともかく黒神めだが、ものすごくきよとんとしてま  
すから」

なじみちゃんの説得アード、私による僕の説得……。  
ほんとにあんな痛そうな人を見る目が痛いんですが。

「俺はもう慣れましたよ……」

「ふむ……悩みがあれば聞くぞ？」

特に雪島三年生」

「そうですね。」

あ、楔くんと呼ぶのとみそぎんちゃくで呼ぶのは……  
楔くんがいいですね、はい。

というわけで、悩みはありません」

「そうか、ならば良い。

ところで、球磨川会長は何か私に御用か？」

「『おいおい、敬語を使えよ。

僕は先輩だぜ?』」

「これは失礼した。」

「それでは、私に何か用か？」

「『見事に無視してるね。』

「そういうところ、嫌いだな。」

「前会った時は可愛かったのに。」

「二歳の話であろう？」

「貴様はあまり変わらないな」

「なじみちゃんー。大丈夫ですか？」

「榎くん、なじみちゃんの首が締まっています」

「『あ、やべ』」

「………球磨川君？」

「『はい？』」

「正座しなさい」

「『えー』」

「月夜ちゃんも」

「え、何ですか。て、いひゃいれす！

「にゃんのふはみははるんれすか！？」

十七話目！（後書き）

シ「最後って何言ってたの？」

月「痛いですが、何の恨みがあるんですか。

ほんとひどいですよねー、なじみちゃんって、

原作じゃ、いい人って書いてありませんでした？」

シ「二次創作だし」

月「ですよねー」

十八話目！（前書き）

まさかの、話は少しも動いていません。  
今回は、メタ発言注意！



## 十八話目！

「そろそろ、本題に入ってもらいたいのだが」

「『ん？あ、そうだね。』

でもちよつと待って、足がしびれて動けないんだ』」

「なじみちゃん・・・私、何か怒らせるようなことしましたか？」

「静粛に、僕がいつていうまで二人とも正座のままにいなさい」

はい、みんなの主人公・つききよ、ならぬ雪島月夜さんです。

絶賛正座中ですよ。なにかしましたか、私・・・。

「やあ、買い出しから戻ってきたよ」

「マグロン！」「真黒くん！」「真黒さん」「お兄様？」「・・・」

左から、私、楔くん、高貴くん、黒神めだが、  
そして、なんか怖い顔してるなじみちゃん。

「どうしたんだい、この状況。

いや、それよりもめだかちゃん！！

兄の愛を受けに来たのかい！？」

「違います、お兄様。

とりあえず、寝てください」

「楔くん、楔くん。」

私は今、妹が兄をかかと落として気絶させるといふ暴拳を見た・  
様な気がするんですが」

「『奇遇だね。僕もそう見えた気がするよ……』」

「二人とも、正座といていいよ。」

あと、僕は今日気分がすぐれないから帰るよ」

「そうですか、私も具合悪いんで帰ります……ひゃうー！」

あ、足が、痺れ、て……。  
これ、死ぬる……。

「『あははー、馬つ鹿みたい。  
て、うわわ。ちよ、やめ、あっ』」

「ふふふ、痺れた足はどんな刺激でも、  
気味悪く感じるものですよ……！」

「『なーんて、過<sup>マイナス</sup>負荷の僕に、  
そんなものが効くとでも？』」

「んな！？私の必殺技が……」

「……じゃ、僕帰るから。  
みんな、さようなら」

「」「」「さようなら」「」

「ちよ、なじみちゃん！」

私も・・・あ、あうう」

「では、本題に入ってくれないか？」

めだかさん、そういえばそうでしたね。  
てか、私も話は聞いてないので。

「『ああ、本題ね。』

・・・いいよ、単刀直入に言うよ？』」

「・・・ああ」

「『僕と契約して魔法少女に・・・ウボア！』」

「何言ってるんですか、球磨川さん。

壊してもいいですか？」

「楔くんー？」

私と契約して、下僕にでもなってくださいよ」

「『だが断る！』

ふはは、きっと何物にもなれないお前たちに告ぐ！  
生存戦略・・・ゴバア！？』」

「それもだめです、球磨川さん」

「私だってペンギンになら、なれる・・・！  
てか、せめて集英社にしてください！！」

「『』はないの。」

青春は、いたみなしでは過ごせない。』

「それは・・・いいですかね？」

「映画化ですけど!!」

それは講談社なんですよ・・・。

いや、同じ人だし、いいかも・・・?」

「貴様ら、本題に入る気ないだろう?」

あ、バレました?

十八話目！（後書き）

次回からは、展開が動きます！（たぶん）

十九話目！（前書き）

チヨイ長めの急展開です。



「『そうそう、あれは誤解だつて。」

ちよつと顔をはがそうと思つただけなんだからね?』」

「ああ、そうなんですか。」

「・・・ん?あ、いや、いいですね」

「雪島先輩、たぶん今疑問に思つたことは、いいですでは済ませられないと思います・・・」

「おー、高貴くんがずいぶんまともなことを言つようになりました!先輩のおかげですね」

「そうですね。先輩のせいですね」

「ところで球磨川君。」

顔をはがすなんてそんな、どこぞの怪盗でもないんですし」

ルから始まつてンで終わる人や、キから始まつてドで終わる人が、意外とわんさかいますよねー。はい、戯言です。

「『いやー、ちよつと試したかつただけなんだよね。」

ま、阻止されちゃつたわけだけど!』」

「そうなんですかー。それはよかつたですねー」

原作がかなりの勢いで崩壊してますが、まあ、この後、またはがすでしょ。この人なら。むしろ、フラグ建て?



「『そうだよ、よかった。』

安心院さんの前に、君を封印すべきだよね』」

と、ねじをぶっ刺される直前。

私の前でねじを掴み取る人物がいました、ま、こんなことできる人なんて。

「何やってんですか、黒神めだか」

あなたしかいませんよねー、ほんと主人公ですなー（棒）  
てか、マグロンがまだ気絶してんじゃないですか！  
何放置してこつち来てるんですか・・・。

「いやなに、尊敬すべき先輩が襲われそうになっているので、それを阻止しただけだが？」

「どうでもいいじゃないですか。私がどうなったって。

むしろこれはフラグですよ、フラグ。

私がやられた憎しみに、高貴くんあたりが下剋上を起こすとか！  
無関係がいいとか言いつつも私は結局  
人とながつているんですよね。はあ、憂鬱です」

「『おいおい、フラグとか！』

そんな週刊少年ジャンプじゃあるまいし。

でも面白そうだね、そうだなあ。

僕この戦いが終わったら結婚するんだ』」

「そうか、では私は、」

この戦いが終わったら生徒会長にでもなるとしようか」

「二人とも何やる気になってるんですか。  
この戦いつてなんですか？  
何が勝ちなんですか……」

「『もちろん雪島月夜争奪戦！』」

「最後まで雪島三年生を守ったら私の勝ち。  
傷つけたら球磨川の勝ち。良いな」

「『オツケー！分かりやすく好きだよ』」

「いや私は何一つ、よくないんですが！」

「では、俺は審判やりますね」

「高貴くん！？あなたもですか！」

「では……開始！！」

「話を聞いてくださいよ、みなさん！！」

## 十九話目！（後書き）

月「人の話を聞くって大事だと思うんですよ。

いろいろなことを学び取り、

自己の成長へとつなげる・・・これぞまさに人間ではありませんか？」

シ「つまり何がしたいの？」

月「人の話を聞かぬ奴は、相いれねえんだよ！！」

シ「うわ！俺が出てきた！？」

月「つーか、俺の出番ってホントねえよな」

シ「んー、じゃあ次回予告やってみて？」

月「あ？ん、分かった」

シ「では、みなさんに向かってどうぞ！」

月「・・・う、あ。無理！！」

シ「まさかの人見知り！？」

月「替わりまして僕がしまーす！

いきなり始まった争奪戦！！

勝つのはどちらか、そして僕はどうなっちゃうのか・・・？

二十話目！ここまでやってまだまだ中三。

原作は僕が高3になってから！

いつ入るのかな？それまで見捨てないでくださいね？  
それではまた次回！」

シ「あとがきも長くてすみません！！」

## 二十話目！（前書き）

はい、目標達成できませんでした！。

なんのことかかって？二十話目！の前書きあたりを見てください。

はい、宣伝です。

## 二十話目！

と、いうわけで始まりました争奪戦。

赤コーナーは楔くん。

青コーナーは黒神めだか。

・・・これって私はどうしたらいいんでしょうね？

だいたい、原作は黒神めだかが高校一年生のときから始まっているんです。

私はここら辺の原作知識を持ち合わせていないわけで、どう動くかが全く分かりません。てか、役にたたねえな原作知識。そして・・・

これって、俺が出たら普通に黒神めだかが勝ちますよね。

『オンリー孤独』は球磨川君に有効ですし、

私が何をしてモルール違反にはなりませんしねえ。

ん？ああ・・・そうでした。忘れてました、そして役に立った原作知識。

『シ・エン下完成』がありました。

ならば、ここで手の内を明かすことは得策ではありませんね。

てか、思いつき『エキストラ風景』使っちゃいましたよ・・・。

あれは『ミスターアンソウン知られざる英雄』

みたいに認識されないのではなく、

気配を溶け込ませる、むしろずらすといたところでしょうか。

週刊少年ジャンプ風に言うならば、

黒子のバスケのあれみたいな、ぬらりひよんの孫のあれみたいな？

まあ、つまりは認識をずらすタイプなのですが、

観察されるし解析されるし改造されるし、のどっかの三兄妹には絶対会いたくないですねーアハハハハ。はあ・・・。

と、いうわけで今回私は、

「全力で後方に前進！簡単に言いますと  
戦略的撤退！！」

「『あ、逃げた』」

長々と考えてみましたが、逃げるが勝ちの  
とても価値のある戦略的撤退です。

廊下を走るなつて？残念、これは早歩きです！  
それはそうと、

「黒神めだかはなぜ隣にいらっしゃるのでしょうか？」

「もちろん、尊敬する先輩を守るためだが？」

「残念ながらここにあなたの尊敬する先輩はいませんよ。  
いるのはただの・・・雪島月夜です」

「そうか、その通りだな。で、だからどうした？」

「・・・かつこつけてみたはいいですけど、  
やっぱり、括弧つけたほうがよかったかもですね。

あ、黒神めだか、朗報です」

「ふむ、なんだ？」

「もう走れません」

「がんばれ」

「だが断る」

意外と走ってたんですよー。疲れましたよー。

てか、頑張れって言われて頑張るなんて・・・ねえ？

私のキャラじゃないですよ、しいて言うなら僕ですよ。

あ、早歩きなんで走ってませんね。

でもでも、よくいるじゃないですか。

走るなって言ったら早歩きですってという人。

あ、いません？そうですか、そうですね。

さてさて、現実逃避もここらへんにして・・・

「『やつほ、月夜ちゃん。』

僕から逃げられるとでも思ってたの？

うっわ、ばっかみたーい『』」

現実というか嘘に向き合わなくては。



二十話目！（後書き）

月「はぁ・・・」

シ「どつたん？」

月「私はどうしたらいいのでしょうか？」

シ「おお、なんか深そうな話だ」

月「後輩に話も聞いてもらえない駄目な先輩です。

とりあえず、幼女に会いたいです・・・」

シ「普通に悩み相談の上、後半は脈絡がない！」

月「次回！私が大活躍！！」

シ「しないよ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7160v/>

---

異常な私は俺で僕で転生だから

2012年1月14日01時46分発行